

デュルケームの社会動学的考察について

小 関 藤 一 郎

I

真にその名に値する社会学理論で何等かの形で動的考察を含まないものはない。デュルケームの社会学の著作においても動学的考察はその中心的な部分をしめ極めて重要な意味をもっているのである。実際デュルケーム社会学のもつ重要な意義は彼の動学的部分を理解することなくしては正しく評価されないであろう。ところが一部の人々の間ではデュルケームは構造機能主義の先駆者であり、そこに彼の社会学の真の特徴があると考えられているため、その理論は動態的のものをもたないとする見解が強く残っている。また彼の著作の一部¹⁾にはそうした見解を支持させるような表現が存在するが、彼の著作のもっとも初期のものから最後のものに至るその全部に亘って強く根底に流れるものは史的考察、動学的理論への企図である。彼の最初に発表された論文の一つである家族社会学序説 *Introduction à la sociologie de la famille* ²⁾において、社会学にとって歴史的研究がいかに重要であり、また歴史研究にも社会学が不可欠であることが強調されている。こうした歴史研究に対する深い関心は彼が編集の責任者となって刊行された社会学年報 *L'Année Sociologique* においても、関係分野の文献解題や批判紹介にあてられた第二部で相当多くの頁が歴史研究の文献にあてられていたことから明かである。その序文³⁾において彼は次のようにのべている。

「われわれは外部から観察しただけでは、またその下位構造 *substructure* をよく知らなくては、真に社会的現実を認識することはできない。社会的現実がどのように形成されているかを知るためには、それが過去においてどのように形成されたか、すなわち歴史を遡ってそれが漸次構成されてきたかを辿ってみなければならないのである。……現在を理解するためには、現在から離れて見なければならない。」

こうした社会学研究に対して歴史のもつ重要性についてはデュルケームは教育に関する講義においてもくりかえし言及している。⁴⁾ そして最後の著作である宗教生活に関する研究においても、「われわれが未開社会のことを問題にするのは今日の人間を理解するためである」⁵⁾ とのべ、歴史的研究の重要性を強調したばかりでなく1917年に書かれた論文 *Introduction à la morale* ⁶⁾ においても彼は歴史的研究は真に人間を理解するためにも不可欠であることを強調している。だから歴史に対する関心は彼の社会学考察の中心部分となっていたのであり彼の社会学から動学的考察を除去することはその真の意義を見失うことになるのである。

II

では彼のいう歴史とはどのように解されていたのであろうか。それは彼の動学的考察においてどのようにくみいられていたのであろうか。デュルケームの歴史的に対する関心は彼が *Ecole Normale Supérieure* で著しく影響された師の一人にす

- 1) 例えば *Les règles de la méthode sociologique*, 14e édit. (1960), Chap. V. Règles relatives à l'explication des faits sociaux p. 89—123 を見よ。
- 2) *Annales de la Faculté des Lettres de Bordeaux* (1888), p.257—281 この論文を筆者は1964—65年フランス滞在中、ボルドオ大学の前教授ラクローズ *Lacroze* 氏の好意によって複写を頂いたので、ゆっくり読むことができた。ラクローズ氏に対して深く感謝する次第である。ラクローズ氏は1964年10月でボルドオ大学を停年退職されたがデュルケームの講義に出席した数少ない生存者の一人である。
- 3) *Préface de l'Année Sociologique*. t. II. P. V.
- 4) *L' Evolution pédagogique en France*, 2 vols (1938), および *Education et Sociologie* (1922)
- 5) *Les formes élémentaires de la vie religieuse* (1912)
- 6) この論文は後 *Leçons de Sociologie* (1951) に改められた。

ぐれた歴史学者 Fustel de Coulanges があつたことを考えてみれば容易に理解されるところであるが、彼は *L'Année Sociologique* の序文でこの師の言葉を引用して次のようにいっている。

「ド・クーランジュは繰り返えし真の社会学とは歴史学であるとのべていた。歴史が社会的に行われさえすれば、これほど明白なことはない。」¹⁾ こうした意味の言葉は別のところでものべられている。1903年彼は制度の成立がどのようにして実現されたかを主要問題とする社会学にとっては歴史的比较方法こそが問題解決にとって利用できる唯一の用具である²⁾ とのべ、結局「社会学はその大部分が一定の仕方で解された歴史学なのである」³⁾ と明言している。更にまた彼はフランス哲学会における「歴史における未知なものと無意識的なもの」に関する討論の中でも歴史学と社会学を全く相異なる方法を用いる二つの別の学科だと考えてはならず、「真にその名に値する社会学に關して私の知る限り、歴史的な性格をもたないものはない」⁴⁾ とものべている。しかし社会学と歴史学は全く同じものとされてはいない。さきに引用した1903年の論文でも両者はともに社会的事実 *faits sociaux* を扱うものであるがその差異は歴史がそれを個別化といふ観点から扱うのに対し、社会学はそれらを普遍化してそこに法則を発見しようとする点にあるのであるといつて次のようにものべている。

「歴史家もまた社会的事実をとり扱うのであるが彼はそれらが一族または一定の時代において示す個別的な面をとくに強調する。つまり、歴史家が一般に研究しようとしているのはその発展の一時期における特定の国民社会や集团的個性の生活である。……これに対して社会学者は専ら種々の社会⁵⁾ の中に見られる一般的関係あるいは検証可能な法則を発見することに努めるのが任務である」⁶⁾

しかし両者の区別は余り厳然たるものではなかつた。デュルケームはクロウチエ Croce やソレル G. Sorel などの著作に対する批評⁷⁾ の中で両者は区別はされるが、本来不可分のものでその差は程度的のものでその間に根本的対立があるのではない。両者は実際にはむしろ二つの学科というよりは、相互に補完しあうべき二つの異った観点にはかならないと見るべきであるとのべている。しかも、この文中においては科学的歴史 *Histoire scientifique*⁸⁾ または社会学という表現さえ用いられている。だからデュルケームにおいて社会学が歴史から分離して成り立つことはなかつたのである。そうした主張はたんに教説だけではなく、彼の調査研究には常に実施されていた。彼の主要著作で歴史的資料（時には民族学的資料であることもある）に依拠しなかつたものはなく、社会制度の史的展開は常に彼の主題となつていた。家族に関する研究⁹⁾ 社会分業論、刑罰の発展に関する二つの法則¹⁰⁾、フランス教育発展史 *L'évolution pédagogique en France* や宗教社会学に

1) *L'Année Sociologique* I, Préface p. III

2) *Sociologie et sciences sociales* (*Revue philosophique*, 1903) reproduit in Fillon (edit), "La science sociale et l'action" p.153

3) *ibid.*, p.155

4) "L'incoune et l'inconscient en histoire", Séance du 28 mai, *Bulletin de la Société Française de Philosophie*, VIII (1908) p.229

5) ここでいう社会とはもちろん、社会種 *espèces sociales* にほかならない国民社会と理解されるものである。

6) *Sociologie et sciences sociales* p.156

7) *L'Année sociologique* t. VI (1901—1902) p.123—125

8) *ibid.*, p.125

9) デュルケームは家族に関しては多くの講義をし、論文もかいたが、それは一つの著作としてまとめられて刊行されることはなかつた。しかし、デュルケームは家族についてはこれを重視しており、そのために多くの研究を行い発表してきた。今日そのすべては残っていないが、現在残っているものでは第一に最初の論文ともいふべきボルドオ大学の年報(1888)にのつたものが「家族社会学序説」*Introduction à la sociologie de la famille*, である。ついで「近親婚の禁止」*La prohibition de l'inceste* (*L'Année Sociologique* t. I, 1898), 「オーストラリア社会における婚姻組織について」*Sur l'organisation matrimoniale des sociétés australiennes*, (*L'Année Sociologique*, t. VII, 1905), 「当事者双方の合意による離婚」*Le divorce par consentement mutuel* (*Revue Bleue*, 5e série, V, 1906), 「夫婦家族」*Famille conjugale* (*Revue philosophique* XC, 1921) がある。このほか *Famille paternelle* についての講義はなされたのであるがその草稿は見つからないままでいる。なおデュルケームの家族および親族について見解や家族に関する著作の事情については G. Davy, *Les sociologues d'hiers et d'aujourd'hui* 第二部, 第一章に詳しい。

10) *Deux lois de l'évolution pénale* (*L'Année Sociologique* t. VI, 1901)

関する著作¹¹⁾、財産や契約制度¹²⁾に関する研究をみればこのことは明かである。現代社会を主として扱った自殺論 *Le suicide* においてさえ、自殺の一類型である主として近代以前に見られる *type altruistique* の存在を指摘しており、中世以前の社会にまで遡った言及を含んでいる。そこにはベラーが指摘しているように社会連帯の構造における長期的変化に関する考察が含意されているのである。¹³⁾

ところでデュルケームがこのように強調したばかりでなく、諸々の著作において展開してきた歴史的方法とはどのように理解されていたであろうか。デュルケームは「社会学方法論の規準」の中でオーギュスト・コントを批判している。デュルケームはコントの正統の後継者をもって自任しているが、同じように実証的方法を強調していても両者の間にはかなり大きな見解の相違がある。¹⁴⁾ デュルケームがコントを批判しているのは「コントが社会現象の総体を結局は人類の発展にすぎないものとし、そこに何等かの能力の創造の介入も必要であるとは考えなかった」¹⁵⁾ からである。つまり社会学者が研究によって相次いで明かにしていくあらゆる実質的能力 *dispositions effectives* はすでに生物学が早くも社会学のために構成してくれた原初的類型の中にすべて萌芽として見出されるのに相違ないという考え方が問題とされたのである。コントはこうした見解から社会生活の重要な事実である進歩は心理的な要因に依存することになると認めたことになる、だから彼にあっては文明のもっとも複数年形態も発達してきた心理生活にほかならず「歴史的方法によって示された社会における継起の法則もそれが直接であれ間接であれ、常に異議なく、人間性 *nature humaine* についての実証的理論に合理的に結びつけられない限り、窮極においては認めることはできない」¹⁶⁾

とされたのである。そうした方法は結局心理学的要因に決定的役割を認めることに還元されるというのである。こうした人間性という心理的要因に社会現象の起源を求める仕方は社会現象をその演ずる効用や機能に起源を求めると同様拒けられなければならない。¹⁷⁾ だからデュルケームにとっては社会現象あるいは社会的事実の原因はそれらの事実の特性である独特性 *caractère sui generis* にしたがって、社会の状態の中に求められなければならないのである。こうしてまずデュルケームは「社会的事実の決定的原因 *cause déterminante* は個人意識の状態の中においてではなく、先行する社会的事実 *les faits sociaux antécédants* の中に求められなければならない」¹⁸⁾ という第一の命題に到達するのである。と同時に「社会的事実の機能もその本質は社会的なものつまり社会的に有効な結果の産出ということにあるのだから、その説明も当該社会的事実と何等かの社会的目的との関係の中に求められるべきものである」¹⁹⁾ とされるのである。しかし本来社会現象は歴史的性格をもつものであり、史的展開において変化するものであるから、ある一定時点または一定地点において見られる社会現象の形態はそれより以前の形態と全く無関係ではあり得ない。そうすると、先行する社会的事実の中に原因を求めるということは当然のことであり、改めて方式化する必要のないように思われる。問題は先行する社会的事実とどのように関係しているかを明かにすることである。この点についてデュルケームの説明は必ずしも明瞭ではない。ここでわれわれはデュルケームがモンテスキューについて論じた著作の中における歴史の位づけに関する一節を想起してみなければならない。そこで彼は次のように方式化している。「社会生活を動かす条件には二つの種類がある。その一つは土地の性質とか社会的単位である

11) 宗教については *Les formes élémentaires de la vie religieuse* のほかに *Le totémisme* (*l'Année Sociologique* t. V), *Le problème religieux et le dualité de la nature humaine* (B.S.F. P. XII, 1913) などがある。

12) *Leçons de Sociologie*

13) R. Bellah, *Durkheim and History* (A.S.R, 1959)

14) この点については F. Pécaut, *Auguste Comte et Durkheim*, R.M.M. XXVIII (1921) p.639—655 を参照。

15) *Règles* p.98

16) *Règles* p.99

17) *Règles* p.108—109

18) *ibid.*, 109

19) *ibid.*, p.109

とかいったような現在の状況 *circonstances* の中にみられるものであるが、もう一つは歴史的過去の中において見られるものである。実際丁度児童が別の親から生れておれば別人となったであろうように、社会も先行する社会の形態によって著しく異なるのである。もしそれが未開社会を祖先にもっていれば、社会は非常に文明の進んだ国民社会を祖先にもっていた場合とは同一であることは不可能である。しかるにモンテスキューはこういった諸社会間の継起関係とそれらの類縁関係 *parenté* を知らなかったのだからこうした類型の原因を全く看過してしまっていた。そしてモンテスキューは人々を動かしているこの背後の力 (*vis a tergo*) を少しも考慮にいれることはなく、ただ環境的状况に対して注目したにすぎなかった。』²⁰⁾ この文によればモンテスキューは社会の歴史を解釈しようとして、当該社会がその継起の中においてどんな位置をしめるのかを探求するのではなくて、その土地の特質とか人口数だけを探求しただけであり、それは歴史的方法に反するものであることになるのである。しかしそれならば社会生活の原動力となる²¹⁾ 二つの条件の間にはどのような関係が存在するとみられるのであろうか。モンテスキューを批判した時点におけるデュルケームにはその点に対する見解は必ずしも明白ではなかった。このあいまいさは上述した先行する社会的事実という表現にも残されているといえよう。デュルケームはド・クーランジュがのべたように真の社会学すなわち社会学的な歴史研究を行うため社会学者がとるべき方法は制度の種々の形態を同一種の民族において比較するだけでなく、それに先行する社会のすべての状態において比較することが必要であるとしこの方法を発生的 *génétique* であるとよんでいる。²²⁾ 彼は発生的方法こそが真に社会現象や制度の分析と総合を可能ならしめるものであるという。比較法はたんに一定時点における横の比較だけでに止まってはならず、時系列を通じて適用されなければならないのである。そしてデュルケームは制度についてその起源にまで遡ることが必要であることを家族、宗教に関する研究

において実行してきている。またそうした点から家族のもっとも古い形態として氏族 *clan* を考察し、宗教のもっとも原初的な形態としてトーテムシステム *totemisme* の分析をはじめてきた。この起源にまで遡るといふ発生的方法はたしかに注目しに値するものであるが、起源の形態または原型といったものは科学的研究の当初からそうしたものとして与えられていることはできない。彼がもっとも歴史的方法を適用して輝かしい業績をあげたのは教育に関する著作とくに *L'Evolution pédagogique en France* であるといえるであろう。そこで彼は19世紀末期から20世紀初頭にかけてフランスにおいて最大の問題となっていた中等教育の改革に役立つことができるようその史的考察を始めたのである。ところで彼がそこで適用した方法は以上のべた発生的方法であった。デュルケームはここでこの方法に従って中等教育のもっとも古い型、中等教育の原型を中世における教会附属または修道院附属の学校に見出すのである。そしてこの学校が漸次発展して *Universitas* (大学) の基礎的教育の部分を担当とするコレージュとなっていくというのである。²³⁾ デュルケームはこのように中等教育判度の萌芽を中世の学校に見出し、それを起点として中等教育制度の史的展開を記述し、説明しているのであるが、そこでは発生的方法は歴史的方法と同じものあるいは歴史的方法の不可欠な前提となっていたのである。

しかしその場合、デュルケームはどのようにして萌芽なり原型をいうものを見出しえたのであろうか。それは研究の対象となる社会的事実すなわち制度についての分析なくしては萌芽が何であるかを決定することは不可能である。中等教育の萌芽が中世の教会附属学校などに求められるのは何故であるのか、どういう理由によるのかは明かにされていない。そこにはデュルケームがある一定の考え方をすでに予想していたと考えざるを得ない。そして、それは明示的に展開されるべきであったにもかかわらず明示されなかったのである。またモンテスキュー論の中で論じられた社会生活の原動力 *moteurs de la vie sociale* とはど

20) Montesquieu et Rousseau, p.108

21) *ibid.*, p.109

22) *Règles* p.137 ここでデュルケームはいう

23) *L'évolution pédagogique en France* t.1. chap. II—VI

ういう概念なのであろうか。デュルケームはその条件を生態学的なものとして歴史的先行要因との二つにわけているが、この二つは全く平行的な、同時的なものなのであるのか、両者はどういう関係にあるのかもまず明かにされなければならない。それと同時にこの原動力の条件と萌芽とはどういう関係になるのかも明かにされなければならない。しかしデュルケーム自身はそうした点を明かにすることにまで分析を進めていなかった。あるいはそうした点にまで深く進むことの必要性を感じていなかったといえる。こうしたことを考えると、先行する社会的事実の中に原因を求めべきであるといった後で次のような説明の意味が理解されるであろう。デュルケームは方法論 *Règles* の第五章において、²⁴⁾ 上述の第一の方式化を行ったあとで次のようにのべている。

「社会現象の説明の原理は先行する社会的事実に求められるべきであるが、このことは社会形態学的事実 *les phénomènes morphologiques* にもまれた社会生理学的事実 *les faits physiologiques* にも同じように適用されるのはもちろんのことであるが、前者の方が社会学の説明において支配的役割を演ずることになる。また社会的事実は心理的事実の独特な結合によって成立するのであり、その本質はこの結合 *association* ということにあるのだから、社会現象はこの結合の形態にしたがって、つまり社会を構成する部分 *parties constituantes de la société* の結合の仕方とともに変動することになるべきなのである。」²⁵⁾

こうした各構成要素が結合して作る全体は内的環境 *le milieu interne* といわれるのであって、「すべて何程か重要性をもつ社会的過程の第一の起源はこの内的社会環境の構成の中に求められるべきである」²⁶⁾ とされるのである。そしてこの内的社会環境の構成要素として事物、一それは1. 物的対象、2. 社会的活動の結果として生ずる法律、慣習記念碑等の文化的対象を含む一と人間の要因とが区別される。しかしこの中前者の事物は社会の活動が加えられる材料であるから、社会の原動力となりうるのは本来の人間環境だけとなるのであり、社会学者にはこの環境の特質を発見すること

が主要な課題となるのである。²⁷⁾ つまり、デュルケームのいう先行する社会的事実というのは単に歴史的な意味をもつだけでなくこのように構造的意味をもってくるのである。しかもこの要素の結合という一つの全体は基体 *substrat* 的要素である形態学的事実と作用的、流動的な要素をなす生理学的事実との立体的構造をなしていることを含意しているものといえるのである。だから歴史を動かす原動力の二つの条件というのはこのような構造要素として結びつき、関係しているといえるであろう。ここで特に留意すべき問題は上述した一方の社会の内的環境に対する物的環境の関係と他方の形態学的事実も、生理学的事実に対する関係とは同じ面をさしているのが、あるいは全く異った面をさしているのかという点である。デュルケームが論述してきている順序からすると、形態学的事実は内的社会環境とは対応するというか同じ動力的な面をさしているように思われるし、また論理的に考えればそうなるべきであると考えられる。しかし、そう考えることはデュルケームの真意ではなかったように見られる。何故ならデュルケームは内的環境である人間の環境を特に重視し、しかもそのうちでもとくに動的密度 *densité morale ou dynamique* を重視しているが、²⁸⁾ それはむしろ人間の意識的あるいは意志的活動の重要性を認めたものとされるのが至当であるからである。これに対しデュルケームが優越的役割が認めらるべきであった形態学的事実はむしろ意識的活動ないし意志的活動の外化、固定化したものである。だから、有機体との類推をもっていえば、それは生理的機能を保護し、支えるものではあるが、原動力という観点からみればそれが優越性をもつことはあり得ないのである。この点についてはたしかにデュルケームの表現そのものに瞬時さがのこっているほか、分析の過程においても不用意に有機体的類推が用いられているため、真意を把握することが必ずしも容易ではなくなっている。しかし根本的にはデュルケームがモンテスキュー論で行った分析はまだ未熟であり、むしろ

24) *Règles* のことをこのように略して用いる。この五章のところは p.109 をさす。

25) *Règles* p.111

26) *Règles* p.111

27) *Règles* p.112

28) この点は分業論でも方法論でも変りはない。

「方法論」にきてかなり明確化されており、その真意は歴史的継続を認めつつも、社会現象は各時点においては立体的構造をもって動いているのであるから、その支配的な要因はその人間的環境特に動的密度にあると見たものであるといえよう。それはだから地理的決定論を排しむしろ歴史における人間の主体的作用を重視したものであるといつてよいであろう。しかもデュルケームは歴史的発展をコントのように直線的な発展、どこにも齊一的にみられる発展段階という見解を全く排除していることを注視すべきである。

人類社会を一の巨大な存在とみるとい見方に対して社会種 *espèces sociales* の存在を強調したこととこうした種による発展の展開状況の相違を認めたことはコントに比べて大きな進歩である。そこにはドイツの歴史学派の学者²⁹⁾たちからうけた影響がどの位作用していると見られるべきか、容易に断定できないが、モンテスキューから学んだ社会類型 *types des sociétés* という見解が、歴史学派の民族的特性の強調とは決して相い容れないものではなかったことを指摘することだけができるであろう。

III

デュルケームの社会動学についての理論的分析を見ると以上のようなものである。それは必ずしも成功をおさめたともいえないもので、上述したように多くの不明確な点、曖昧さを残している。しかしデュルケームは決して没歴史的 *ahistorique* でもなかったし、反歴史的 *anti-historique* でもなかったことは否定できない。それは彼の個々の研究業績がこれをよく示している。彼の著作の中でとくに何人にも引用される社会分業論における構造的連帯から有機的連帯への推移など周知のものはここでは省略して、比較知られていない家族に関する考察とフランスの教育発展についての考察から事例をとって、デュルケームの具体的な動学的分析をみることにしよう。社会の発展はホルドとよばれる単環節的集団が漸次複雑化していく過程

であると見られているが家族の起源は氏族 *clan* とよばれる未分化の社会に求められる。¹⁾ この氏族は現在われわれが家族的と考える機能のほかに宗教的、経済的、政治的な機能をも同時に営んでいたのである。氏族が家族集団であるのはその成員たちが同じ祖先から出た親族者 (*parents*) であると考えているからである。ただこの親族 *parenté* は氏族の人々においてはトーテムを共同にしていることによって成立すると考えられている。だから氏族の中には今日われわれが家族とよぶものすなわち核家族の存在が認められていたのである。この氏族が分業の過程が漸次進んでいくにしたがって機能分化をとげていき、そこから宗教的機能や政治的機能あるいは経済的機能などが分離していった近代社会にいたってデュルケームのいう夫婦家族 *famille conjugale*²⁾ となっていくのである。デュルケームは家族が血縁団体ではないことを認めているが、そこにおいて結婚が大きい役割をもつことを明白に承認している。家族のこの分化は社会構造の変化にともなうことはもちろんであるが、この外的変化にともなう内的变化をとげていることも看過されていない。デュルケームによれば、夫婦家族となるにつれて、家族関係は財産や政治的権威との関係から段々と離脱して人格的關係となっていくのである。こうして夫婦家族においては児童に対する道徳的訓練、いわゆる社会化 *socialisation* とか成員に対する精神的感情安定の供与が重要な機能となってくるのである。この分化の過程は家族の機能の縮小あるいは本質的機能を除く副次的機能の消滅、減退の傾向を意味するものである。こうした構造変化と機能分化の過程をデュルケームはきわめて豊富な資料にもとづいてはつきりと叙述している。これらの点においてデュルケームの制度の歴史的変遷に対する鋭い洞察の一端をうかがい知ることができる。

しかし、これよりももっと制度の歴史的変遷についての叙述で豊かな内容と数多くの示唆を含んでいるのはフランスの教育の発展に関する著作で

29) デュルケームは1885—1886年ドイツに留学したが、とくに当時のドイツ社会科学精神科学で支配的であったワグナー、シュモラー、イエーリング、ポスト、ヴント等から多くを学んできている。Revue philosophique(1896)

1) La prohibition de l'inceste et ses origines (L'Année Sociologique t. I p.2)

2) これは今日の言葉でいえば核家族、小家族を指すものと考えてよいであろう。

3) L'Evolution pédagogique en France, 2 vols. (1938)

ある。³⁾ ここでデュルケームは上述したように中等教育の歴史を探求するのであるが、中等教育の萌芽は中世の教会や修道院属の学校に見出されるのであるが、それはこれらの学校では古代における学校とは異り、すべての学科の教授が同じ場所で行われただけでなく、同一の道徳的指導原理の下に行われたからなのである。そしてこれらの教会学校が漸次発展して社会情勢の変化、進展ともなって漸次 *Université* となっていくのであるが、デュルケームは12世紀頃にすでに文芸復興 *Renaissance* の第一波の動きともいべきものがあり、それがこうした学校に対する人々の需要と愛着を増大せしめていたと説明するのである。そして最初に成立した *Université* はまず教師たちの組合として成立したのであり、そこで第一の要件は教師の人的結合であって、各種の学問の結合という意味は第二次的なものでしかなかったことを明かにして、社会学的に重要な指摘を行っている。しかもそうした知的な活動の成立を促進させた背景には欧州社会における著しい空間的移動 *mobilité* の流れがあったことが注意深く指摘されている。そうした *mobilité* が *densité morale* の成立に大きく作用していたことが看取される。大学の成立後の発展とコレージュの形成についてデュルケームは興味ある叙述を豊富な資料を駆使して行っているが、その点についての詳しい叙述は省略して、この大学のコレージュにおける教育内容についての知識社会学的に見て興味する説明を見ることにする。

コレージュの教育内容は三科 (*trivium*) と四科 (*quadrivium*) から成っていたが、このうち特に重視されたのは三科でそれは文法、修辞学、論理 (弁証論) から成り立っていた。この三科はいづれも形式に関する知識の教育であるが、それらが重視されたのはキリスト教精神に基づく全人教育が当時の基本的精神となっていたからである。しかも時代の変遷とともに三科の重点は文法重視から論理の重視に移行する。そして中世末期 *スーラ* 哲学が優勢をしめたのはこの論理重視の傾向の頂点に達した時代であるが、その後論理は余

りにも煩瑣な形式的詭弁に墮していくのである。こうした傾向をデュルケームはルネッサンスの思想家たちのように単なる誤謬に基づくものではないで、それがあがる意味で時代の要請にこたえたものであり、それがいつの間にか逆機能 *dysfunction* を演ずるようになったのであると説明する。スコラにおける論理至上主義に対して次のような説明がある。

「本来、現実はあるゆる意味において無限であるが、学問は結局有限な体系であるにすぎない……。ところで人間がそうした厳密な学問の方法を適用できるのは、中世においては数学的方法が適用される領域だけであった。……しかるにそれは人間社会を対象とするものを含む経験の世界には適用されることはできない。それにもかかわらず人間の反省的思索は数学的方法の適用が及ばれない世界にもむけられ、それに対して推理を行うことを断念することができない。そうした領域に対して用いられる方法は観察であるが、中世の人々は観察の何であるかは知っていても、それを規則的に組立て、論証的要素を提供するにはこぶことができなかった。このため彼等はその補いとして討論 *disputatio* を用いた。それこそが論理学の本質的要素であった。」⁴⁾

こうして論理は中世の努力の限界を示している。こうした中世の教育が論理的悟性の中に閉塞して現実に眼をそむけていたのを改めるのがルネッサンス思想家たちの課題であったが、ルネッサンスという知的運動の社会的条件についてもデュルケームはこれを明かにすることを忘れていない。ここでは当時の経済社会における全般的変動の社会的特徴⁵⁾が指摘されている。そうした条件がルネッサンス思想の発達を促進したのであるが、デュルケームは人文主義 *Humanisme* というルネッサンス思想の特徴としてその *formalisme* をあげるが、それがいかにフランスの知識人の精神に深くしみこんでおり、またそれに基づく教育がフランスの国民精神の特質の形成にいかに大きな影響を及ぼしたかを明かにしている。フランス17世紀の古典主義にみられる普遍主義的な人間考察、*ビュロオクラシー*の成立などすべてこの *formalisme* と無関係ではないのである。と同時にフランス人独特の個人主義もこうした文化的条

4) *L'évolution pédagogique*, t. I. chap. 131

5) そこでは、第一に、市場の拡大と人々の欲望の増大と活発化、第二に生活水準全般の向力とこれに伴う経済生活に対する平等の意識の昂まり、第三にブルジョワの意識の向上と国民社会の自覚の成立などがあげられている。

件を離れたり、これを除いては考えることはできないのである。デュルケームはまたこうした叙述を通じて伝統の形成と社会の変動における伝統のもつ役割について興味ある指摘を行っている。ただ残念ながらそれは十分に方式化されるには至っていないが、伝統のもつ方向規制力ともいべき点は巧みに描き出されている。これはある意味では *conscienc collective* の連続性あるいは文化の連続性ということを意味しているともいえる。

なおこのほか社会の構造変化に関する重要な考察と指摘を含む著作として遺稿を整理して刊行された *Leçons de sociologie : physique des moeurs et du droit* (1950)⁶⁾ をあげなければならない。この書でデュルケームは個人主義の発達を分業論でなしたように、形態学的 *Morphologique* な要因である人口の量的増大——それによって個人は従前の厳しい伝統的統制に従うことが減少する——やその動的密度 *densité morale*——成員相互間の作用の交換が増大することを意味する——などの作用とそれに伴う集団意識 *conscience collective* の拘束力によって説明するのではなく個人主義を促進せしめるものとして国家の機能をあげていることが注目される。すなわち、社会の構造分化にともなって国家という中立的、調整的機能をもつ機関が大きく浮びあがってくることを明かにしているのである。もちろん国家の機能はそれだけ単独ではたらくのではなく、中間集団の力の増大に対する拮抗力としてはたらくのではあるが国家の役割と個人主義の発展とが平行しているという把握は興味あるものである。それはまた社会の成員数がまし量的に大きくなるにしたがって普遍主義的志向を多くもつようになることを含意しているのである。彼は知識人の役割を論じて個人主義擁護に努めることが肝要であり、それこそフランス革命によってもたらされた新しいフランスの精神の伝統を守ることになるのであると訴えているがその個人主義はただ単に理想とてのみ考えられたのではなく、社会構造分化の所産として近代社会の基底の価値たるべきものとして理解されていたのである。

以上若干代表的な著作についてだけ瞥見したがこうした社会構造分化という史的発展はすべてのデュルケームの著作においてその中心的テーマである。これらの具体的な研究において扱われる問題は多岐にわたっているが、注目すべきことは社会構造の分化にともなって社会的理想が発展してきているという構想が含まれているということであろう。たとえば以上みた教育史の発展は同時にフランス精神史とその社会文化的条件を理解する指標として見らたており、分業の発展や国家の抬頭、中間集団の変遷は個人主義思想の成立、発展との関連からあるいは *culte de la personnalité individuelle* の成立の条件という点から考察されているといえるであろう。それはだから換言すれば、国民社会における合理的な理想の発展を中核とした考察である。そこでは精神的価値が歴史において主動的役割をもち、形態学的要因からは独立していることが容認されていると考えられる。たとえばデュルケームは中世のキリスト教世界観の主要な特徴が当時の学校教育にいかにか影響したかまたそうしたキリスト教の精神が人文主義の形成にも影響を与えていることなどが明かに叙述している。そこにはそうした理想がその依存する条件からはなれて、独立的に継続性、発展性をもっていくことが示されている。歴史的社会的現実において文化の伝統がいかにか文化の発展に大きく作用するかをデュルケームははっきりそこに例証しているのである。このことに関係してわれわれはデュルケームが集団表象 *représentations collectives* の基体からの独立性を認めていることを想起しなければならない⁷⁾。それはデュルケームが方法論の中で形態学的事実が優越的役割をもつと述べているにも拘らず、実際にはむしろ集団表象⁸⁾ *représentations collectives* が自律性をもちかつまた優越的な役割を演ずることができることを容認していたことを意味するのである。しかしながら、デュルケームには観念論的—一元論的の考え方があったとみることはできないであろう。そしてこうした集団表象の重視はすでにデュルケームが宗教に対してははじめから極めて大きな関心を

6) この書の英訳は *Professional Ethics and Civic Morals* と題されている。この書は Mauss によると、デュルケームが *La Morale* としてまとめていたといわれたものである。

7) *Philosophie et sociologie. Chap. IV Jugement de valeur et Jugement de réalité*

8) *Règles* p.111

もってそれに接近していったことにもうかがうことができるであろう。⁹⁾ この宗教に対する接近は彼の構造分化の問題に対する関心からはじまったと思われるが、その際は「宗教こそ、それはほとんど他あらゆる現象が発生する萌芽である。宗教はその始源から、その中に、後になって集団生活の種々の表示をつくり出すすべての要素を含んでいる」¹⁰⁾とのべている。彼のこの考え方によれば科学も詩や文芸もその源泉は宗教であるから、科学も宗教が発達し分化した一の結果であることになる。こうしてみると、社会現象の動的な理解のためにはその起源にまで遡ることが必要であるとする考え方と集団表象こそが真に社会生活における優越的な力であることを認める考え方は二つの別々のものであるということはできない。むしろ両者は根本的には結びついているというか、矛盾することなく両立するものであるというべきであろう。ただ両者の結びつきをどのように解するかが問題となるのであろう。その点をデュルケームに対する批判を通じてみていくことにしたい。

IV

デュルケームにおける動学的説明の試みその全体に亘って理解し、これを高く評価したのはアメリカの社会学者ベラー Robert N. Bellah である。彼はデュルケームの百年祭 (1958年) の行われた時 'Durkheim and History' と題する論文でデュルケームについての精密な研究を発表した。ところがデュルケームの高弟であり、パリ大学の元文学部長ダヴィ Georges Davy は戦前デュルケームの理論を忠実に紹介し、それを信奉し、「誓信論」De la foi jurée や「氏族から帝国」へ Des Clans aux Empires (Moret と共著) の中でデュルケームの構造分化の進展の理論を展開するとともに、契約の成立をトテム的な社会の変動の中

に求めるなどデュルケーム説を支持していたが、戦後デュルケームにおける動学的理論はむしろ機械的体系論によってとり代られており、デュルケームの企図に基本的に歴史的考察に対する断念が見られるという論文を発表した¹⁾。ダヴィによるとコントの実証哲学講義に対する批判においてデュルケームはコントの企図はすべてを人間の心理に還元してしまうもので、それでは歴史的研究の真の役割は認められないものとしているが、こうした見解は社会学にとってはなくてはすませない歴史を、社会学の客観性を擁護するという口実の下に、放逐することになりはしないかという懸念を表明している²⁾。元来デュルケームは歴史哲学は科学を否定するものでしかないと思えるが、それは³⁾、コントの歴史的方法とその歴史理論とを区別せずに混同して攻撃しているものであると⁴⁾ダヴィはいう。ダヴィによるとデュルケームには二つの基本的傾向があり、その一つは社会種の類型の分類の試みなどにみられる機械論的還元論 *réduction mécanique* でありもう一つは社会的なもの *le social* の特殊性と同時にその歴史性を保持しようとする傾向であるが、この中の前者がコントを批判するとき表面にでてきているからであるとみる⁵⁾。ところでデュルケームにおける機械論的還元論とは何をさすのであろうか。それは方法論の中においても先行する事実よりも *circumfusa* 環境構成要因に対する重視つまり、内的社会環境 *milieu social interne* を集団発展の決定的要因とみる見方⁶⁾をさしているのである。ダヴィはこの内的環境重視を機械論的 (*réduction mécanique*) であるというのであるが、それは説明を社会の機能の全体に求める機能主義的なものであるという意味である。しかしそういう断定は必ずしも妥当ではない。ダヴィはこの点についてはデュルケームの解釈の中にはこのような *réduction mé-*

9) デュルケームの宗教についての研究は1912年に刊行された大著「Les formes élémentaires de la vie religieuse」にまとめられたが、宗教に対する関心はすでに1890年にはじまっている。

10) L'Année sociologique t. II. p. IV—V

1) このことを G. Davy は特に "L'explication sociologique et le recours à l'histoire d'après Comte, Mill et Durkheim" Revue de Métaphysique et de Morale LIV (1949) p. 330—353 においてのべられている。とくに p. 346—353 なおまた Année Sociologique 1940—48 vol. 1. p. 18 2—195 にもこの点の指摘がある。

2) G. Davy, op.cit., (R.M.M.)

3) *ibid.*, p. 346

4) *ibid.*, p. 346

5) *ibid.*, p. 348

6) *ibid.*, p. 347

canique への傾向と社会的なもの *le social* の独自性したがって歴史性を認めていく傾向の二つの間にゆれうごいていることを指摘している⁷⁾。たしかにダヴィの指摘した点はそのとおりで、われわれもさきに⁸⁾その点に言及した。しかしダヴィの表現によるならばデュルケームは機械論の見方と歴史の見方の両方の間にゆれうごいて、はっきりしなかったのであって、歴史的变化に対する見方を放棄したものではなかった。ダヴィも認めるように⁹⁾デュルケームは社会的事実の歴史的起源探求とその社会における機能探求とは緊密に結びついているのであって、別々のものではないことを明言して次のようにのべている。

「この科学に課された問題はこれらの規則が歴史的にどのように構成されたか、即ちそれらの規則を作らしめた原因は何であるかを探求することおよびこれらの規則がどんな効用を果たしているか、社会においてどのように機能を営んでいるか、つまりそれらが個人によってどのように適用されているかを探求することである。この二つの問題は区別はされるが実は不可分に結びついている (*solidaires*)。規則の成立を生起せしめる原因と規則が相当数の人々の意識を支配することを可能ならしめる原因は全く同一ではないが、相互にコントロールし、相互に解明し合うべき性質のものである。それ故起源の問題と機能の問題とは同一種類の研究に属するものである。それだから社会学が用いる方法や用具は二つあるのであって、その一つは規則の起源を探求せしめる歴史および比較民族誌であり、もう一つはこの規則が個人の意識に対してもつ權威の程度を測定することを可能ならしめる比較統計の方法である。」

このように起源を求める歴史的説明は機能についての機械的説明を排除するのではなく、それを補うものなのである。だからデュルケームのいう因果律重視は先行状態 *circumfusa du milieu social* の重視を否定することを意味しないのである。しかし両者の結びつきをどのように理解するかということが重要な点であるが、この点についてデュルケーム自身は明示的にのべていない。それをどのように理解するかがデュルケームの社会動学の真の意義を理解するための中心問題であ

る。ダヴィはその点について「客観的説明を求める社会学が原動力を社会的要因——総合的であるが故に独自性をもつ——に認めることに対して矛盾を感じないでいながら、何故個人的要因に対して社会的要因とともに力を認めないのであるのか」¹⁰⁾という意味のことをのべているが、ダヴィのデュルケーム解釈の転換がここにはっきり見られる。ダヴィはデュルケームの社会学をタルドやベルグソンの考え方によって補うべきであると考えているようである。¹¹⁾たしかにそういう見解も成立つであろうが、デュルケームの社会動学理論の理解にそうした個人的要因をもってくるのことは賛成できない。デュルケームにおいてはとくに個人的なものというのはむしろ生物学的次元の人間を意味していることが多い。だからそれは抽象的な人間である。そうした抽象的次元の要因をもってくるよりはむしろ歴史を動かす力としての主体的な人間を考える方が必要でありし、またそうした見方の方が大切なことではないであろうか。デュルケームの場合たしかに個人的な人格という観念は、あれだけ個人的な人格の尊重という価値が確立されなければならないという要請を強く主張しているにもかかわらず、無視され客観性の重視の犠牲にされていることは否定できない。それは方法論上の誤にもとづくものである、しかしながら、デュルケームの実践的意図においても、社会理想においても真の個人の価値や存在理由は決して放棄されたものではない、それはむしろカント的な人格主義的意味における主体として正しく認められていたのである。即ちそれは道徳的行為の主体として確乎たる地位を与えられていたのである。

そうした点についてはデュルケームの道徳論の問題と関連して捉えられなければならないが、歴史的方法の問題に関してはデュルケームの精神的密度 *densité morale* という概念の中にそうした考え方が含意されているといつてよいのではないだろうか。精神的密度とはまた動的密度ともよばれるのであるが、それは人々相互の間の緊密な相

7) *ibid.*, p.348

8) 本稿のⅡを参照されたい

9) *ibid.*, p.35110) *ibid.*, p.353

11) 筆者は1964年ダヴィ教授との面談の際そのことをはっきりきいた

相互作用を意味するのである。そうした相互作用は強い個性的自覚をもち、しかも他者に対して自己を掲げていく主体の存在を除外しては考えることはできないのである。したがって、*densité morale* にそうした主体的な意味を認めることは可能であり、また当然のことといえるであろう。デュルケームに見られる二つの傾向をダヴィのように全く均衡のとれたものとのみ見ることは同意できない。根本的にはデュルケームの著作において見られるように、彼の具体的な動学的研究は以上みたように、集団表象の独自性ばかりでなく、その他の要因からの独立性を認めたものであることは明白である。ところでそうすると、社会形態学的因子が社会の基体となっているという命題や形態学的事実が社会学の説明において優越的役割をもつという命題¹²⁾ はどう解されるべきであろうか。これについて考えるに当ってデュルケームの社会形態学に対する解釈を明かにしなければならぬ。社会学年報における彼の定義によると、

「社会生活はその大きさにおいても、形態においても決定された基体 *Substrat* にもとづいている。この基体を構成するものは社会を構成する個人の群、個人が地上に配置されている仕方、集団関係に影響するあらゆる種類の事物の性質や布置である。この社会的基体は人口の大小、密度の如何、交通路の如何等により異なるものである。しかし他方この基体の構成は直接、間接、すべての社会現象に影響を与えるものである。これらの問題の全体はたしかに社会学にとって重要な問題で、それらはすべて唯一の、同じ対象にかかわるものであるから、同一の学問に属するものである、この学問を社会形態学という。」¹³⁾

この解釈によると、人々が地上の配置される仕方や、人口の大小、人々間の交通関係等が形態学的現象として考えられるが、その基底には人間の結合があるものと考えられる。形態学的現象も人々の結合 *association* あるいは *densité morale* によって規定されるものなのである。だから形態学的事実が優越的役割を演ずるとデュルケームのいった意味は人口の大小、交通路の状況等の生態学的 *ecological* な事実だけではなく、それらを動

かす *densité morale*、つまり人間間の結合を含んでいるのである。だからそのことは決して地理的要因乃至生態学的事実が優位をもつことを意味するのではない。むしろわれわれはデュルケームがこの形態学的事実を他の生理学的事実と区別したことは、社会現象といってもその間に凝結性、流動性において種々の差異がみられ、それらの中には必ずした一義的な対応関係があるのではないことを意味したものとみるべきである。そして各種の社会現象間にはギルヴィッチのいわゆる立体的構造が存在していることが含意されているのである。ダヴィはすでに最初のデュルケーム解説においてそのことを指摘している。¹⁴⁾ しかし社会の動学的考察にとって大切なことはただその点だけにあるのではない。デュルケームがこの形態学的次元の現象と生理学の現象の間には明確な対応関係はない、つまりそれらの変動にはズレが生ずることを含意していたことである。この点については Aimard が明白に指摘しているとおりでである。¹⁵⁾ だから意識的な現象に対する動学的考察は必ずしも他の基体的事について考察と因関係のないし対応関係的に把握されなければならないのではない。このことは文化的な要因ことに文化的伝統の考察に関してデュルケームが継承ないし連続性を明かにしたことと合わせて考えると、その意味が理解されるであろう。と同時に社会現象の変化がその現象の層位によって必ずしも同じ速度ではないことを意味したことはオグバーン Ogburn やマッキーヴァー MacIver などのいう文化的遅滞という傾向をすでにデュルケームは予見していたものとみることができよう。

V

デュルケームの社会動学的考察の結論をのべよう。彼の社会学あるいは社会学の説明は根本的には動学的説明に帰着するといえる。それは時には発生的方法ともいわれるがその中核は比較歴史的方法である。だからデュルケームの社会学の中に機能主義的方法が見られたとしても、それは決し

12) Règles p.111

13) L'Année Sociologique t. II p.

14) G. Davy, Durkheim. (1911)

15) Aimard, Durkheim et science économique

て歴史的変遷を見ることを妨げるものではなかったといつてよいであろう。彼は方法論の結論でものべている。「何程が複雑性をもった社会現象を説明することは、あらゆる社会種を通じてその全体的発展においてこれを追求することによってはじめて可能となる」¹⁶⁾。社会学はこうして比較社会学でしかあり得ないのである。ただこのように比較歴史方法を重視していたにも拘らず、その理論的分析にはかなり明確さを欠くところが少ない。たとえばすべての社会現象の原因はこれを先行する現象の中に求めるべきであるといいながら、社会現象の決定的条件は結合ということにあるから、「すべて何等か重要性をもつ社会的過程の第一起源は内的社会環境に求められるべきである」¹⁷⁾といったりしている。この内的社会環境というのは人間間の結合のことであり、人々間の強い心的作用を意味している。それはたんに体系を構成する要素の機能的説明と同じ意味に考えられてはならないが、文字の上からではそのように解されるおそれはある。結局こうしたことは彼の起源追求が現実の社会現象の本質的特性を充分分析することなく直観的な本質把握に基いてなされ、それをもととして史的発展の説明が行われたため生じたのである。そうした点はたしかに不明確ではあったが、具体的な社会現象の史的説明においてはデュルケームは実に多数の、種々の史料、文献を駆使し、しかもすぐれた史的観察眼を以って、明快な、しかも生き生きとした社会学説を行ってきた。そして彼のこの具体的な方法には今日の学ぶべきものが多く含まれている。とくに「史的発展における文化の継承、伝統のもつ意味」を明かにした点は銘記さるべきであろう。

参 考 文 献

“Introduction à la sociologie de la famille,” in Annales de la Faculté des Lettres de Bordeaux (1888) p.257—81
 Année sociologique t. I (1898)
 “ t. II (1899)
 “ t. IV (1902)
 Montesquieu et Ronsseau
 De la division du travail social

Les règles de la méthode sociologique (1897)
 Evolution pédagogique en France. (1938)
 Leçons de sociologie : Physique des Moeurs et du Droit, (1950)
 Les formes élémentaires de la vie religieuse (1912)
 Philosophie et Sociologie (1924)
 ‘Prohibition de l’inceste’ (Année sociologique t. I, p.1—70)
 ‘Famille conjugale’ (Revue philosophique, 91, 1921)
 ‘Le divorce par le consentement mutuel’ (Revue Bleue, 1906)
 ‘L’individualisme et les intellectuels’ (Revue Bleue, 1898)
 Sociologie et sciences sociales (Revue philosophique, 1903)
 ‘L’Inconnu et l’inconscient en histoire’ (Bulletin de la Société Française de Philosophie, 1908)
 G.Davy, Sociologues d’hier et d’aujourd’hui
 — “ — E.Durkheim (Revue française de sociologie 1960, n. 1.)
 — “ — L’explication sociologique et le recours à l’histoire d’après Comte, Mill et Durkheim (Revue de Métaphysique et de Moale 1949, p.346—53)
 — “ — Emile Durkheim, Choix de textes (1911)
 Bellah, — Durkheim and History (American Sociological Review, 1959)
 Nisbet, E.Durkheim. (1966)
 Aimard, Durkheim et science économique (1962)

「あ と が き」

本稿は1963年関学欧文紀要に発表した論文「Durkheim et sa dynamique sociale」をすっかり書き改めたものである。書き改めたのは1964年バリーで G.Davy 氏にお目にかかった際教示して頂いた論文 “L’explication sociologique et le recours à l’histoire,” d’après Comte, Mill et Durkheim” をよんでから、もう一度考え直し、若干訂正すべき点があるのを発見したのと、G.Davy 氏の意見に対して納得できない点を見出したためである。

16) Règles p.137
 17) Règles p.111